第4期南山大学国際化推進事業 国際ワークショップ報告

「Homo Translator: Traditions in Translation」

斎藤喬

Saitō Takashi

2019年7月4日と5日の二日間にわたり、第4期南山大学国際化推進事業の一環として、南山宗教文化研究所主催となる国際ワークショップ「Homo Translator: Traditions in Translation」が開催された。今回のワークショップでは、日本国内からだけでなくドイツ、イタリア、チリ、韓国から翻訳に携わる第一線の研究者を招聘した上で、オープニングレクチャー、「翻訳の哲学 (The Philospohy of Translation)」、「翻訳理論 (Translation in Theory)」、「翻訳実践 (Translation in Practice)」と計四つのセッションが設けられ、各セッションにつき二人の発表者が自身の研究に基づく報告を行った。

セッション1となる第一日目の午前は、まず南山宗教文化研究所の金承哲所長がワークショップのオーガナイザーとして開会の挨拶と、会議の趣旨についての講演を行った。そこでは本研究所が1974年の創立以来諸宗教間対話の精神を活性化する事業を推進してきたことを踏まえた上で、今回のテーマである「Traditions in Translation」は、今日ますます重要性を増してきている宗教間および文化間における人間の在り方を再考するために「Homo Translator」という役割に焦点を当てていることなどが報告された。金によると、翻訳者は解釈の過程において時代や場所を超える伝統の運び屋でありながら、同時により真理に近い理解へと進むためにテクストを絶えず読み直す「脱神話化」の過程の中にあるため、例えば禅問答のように、ある種暗号化した伝統との間で活発な対話を交わすことになる。

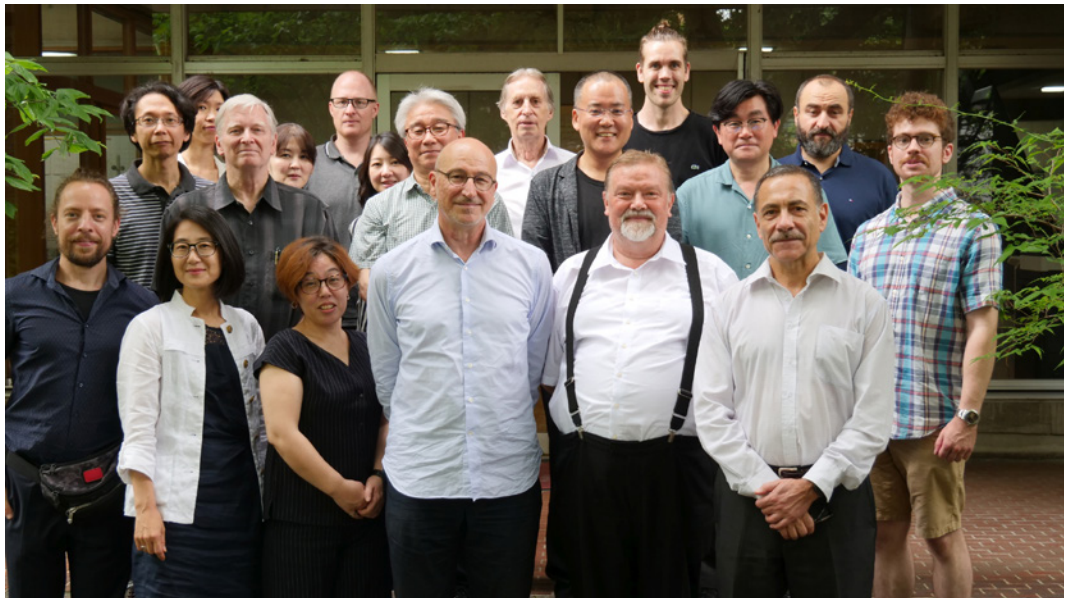
続いてオープニングレクチャーとして、ドイツのザンクト・アウグスティンにあるモニュメンタ・セリカ研究所（神言会）所長のZbigniew Wesolowski師が「Hermeneutics of Understanding the Confucian Idea of Truth: Junzi君子 as a Truth-bearer according to Lunyu論語」のタイトルで講演を行った。そこでWesolowski師は、「真理 (truth)」という概念をめぐって西洋哲学の伝統と古代中国の文化との差異を比較検討する前提として、前者において真理が自明であるのに対して後者において真理であることによって何事も生じないとした上で、両者をつなぐ架け橋となるのは西洋における真理概念を哲学的－解釈学的な問題として概観しておくことであり、比較の視座から『論語』における真理概念を探究するためには「中国学」的な解釈学を主題化することが必要であると指摘する。Wesolowski師によれば、『論語』において、儒家の理想像としての君子は「道

(dao)」における真理の運び屋で、「真理対応説 (correspondence theory of truth)」に基づいており、「仁 (humanity)」と「禮 (ritual)」を順守する君子は何よりもまず個人的かつ道徳的な真理に対応していると同時に儒教における「天道 (heavenly order)」を順守することで社会的かつ政治的な真理にも対応している。このようにして君子は二つの形態によって倫理的かつ道徳的な真理の次元に属しているのだが、言語哲学の見地からすればいわゆる「正名 (rectification of names)」の問題は意味論ではなく語用論のカテゴリーになるのだという。

セッション 2（「翻訳の哲学」）となる第一日目の午後は、初めにイタリアのピサ大学の Adriano Fabris 氏が「Ethics of Translation: A Relation Perspective」のタイトルで発表を行った。Fabris 氏によれば、翻訳とはまず「気まずい経験 (awkward experience)」であり、翻訳をしていると私たちそこに自分自身や自分の生活を見出すことになる。こうした翻訳状況において、私たちは他なるものや異質なもの、折り合いを付けざるを得ない何ものかに出くわすのだという。Fabris 氏は、F.D.E. シュライエルマッハーとヴァルター・ベンヤミンを取り上げながら、西洋思想において展開してきた翻訳理論について両者のモデルを検証しながら、翻訳の仕事に要求される倫理的な動機付けについて指摘する。実際のところ、巧みな訳者というのはさまざまな世界とつながることができる反面、他者性というものを完全に取り除くことはできないが、だからこそこの他者性をより幅広い関係性へと結び付けていかなければならないのだという。

次に、チリ・カトリック大学の Jorge Martinez Barrera 氏が「What do we translate when we translate?」のタイトルで発表を行った。Barrera 氏はまず「創世記」におけるバベルの物語に言及しながら、聖書の記述において諸言語の出現は人間の傲慢さと不服従に対する神の罰であるが、一方でシュメールの詩においてそれは神と人間のではなく神と神の間の競合であり論争なのだとした上で、言語のビッグバンの主要原因として倫理的な動機付けがあることは疑い得ないと指摘する。さらに Barrera 氏は、シュライエルマッハーやオルテガ・イ・ガセットの記述を参照しながら、良い翻訳によって訳者は読者を原語に没頭させるのであって、訳語の特質に適合した翻訳テクストに没頭させるものではないため、翻訳は訳者の作品というよりは読者に働きかける手段なのだという。もし翻訳が上手く行くならば、読者は自分自身の世界を離れ、あたかも別の文化に属しているかのように生き、感じ、考えることができるようになるのである。

セッション 3（「翻訳理論」）となる第二日目の午前は、初めに関西大学の河原清志氏が「An Overview of Translation Studies and Religious Equivalence」のタイトルで発表を行った。河原氏はまず翻訳学理論の立場から、訳者は翻訳テクストを通じてそのイデオロギー性を自ら暴露することを避けられないが、結果として翻訳作品は原テクストのイデオロギーを隠蔽することにもなり、訳者はそこで道徳的な板挟みに陥らざるを得ないと指摘する。翻訳行為自体が社会－文化的、歴史的文脈の中でイデオロギー性を強く帯びているために、翻訳とは「メタファー (metaphor)」としての介入なのである。河原氏によれば、メタファーは使用される文脈に依拠しているが、その文脈があらかじめ地政学的、歴史－文化的、主観的、イデオロギー的などの要因で



第4期南山大学国際化推進事業国際ワークショップの参加者

確立されているため、メタファーはいつでもその使用者のイデオロギーを表象するのだという。その意味で、聖書翻訳を手掛けたユージン・ナイダの「動的等価 (dynamic equivalence)」理論は、訳者自身の「宗教的等価 (religious equivalence)」として見なし得る。

次に札幌大学の佐藤美希氏が「Translating China and the West: Literary Translation / Adaptation in the late Edo and the early Meiji」のタイトルで発表を行った。佐藤氏によれば、文学研究と翻訳学を比較すると、前者においては言語や国家の枠組みで研究対象が分割されており、例えば日本文学においても江戸文学（古典）／明治文学（近代）のようなフィールドの区分が存在することによってこうした「障壁 (barrier)」を乗り越えるのは困難である一方で、後者においては多様な見地からアプローチすることが可能であるため研究対象の文脈をより鋭く焦点化できるという。江戸期までの日本文学が中国文学に強く影響を受けてきたことは言うまでもないが、明治期になって西洋文学の翻訳が流入したことで日本文学が変容したのだとすれば、そこでは何が接続して何が断絶したのかを知ることが肝要である、と佐藤氏は指摘する。例えば鎖国下における読本ブームを一つの基点に、中国文学の「忠実な翻訳 (faithful translation)」から「自由な翻案 (free adaptation)」へという流れの中で、江戸末期にはすでに始まっていた蘭学者や国学者による英国文学の翻訳／翻案を明治初期のそれと関連付けて考えてみると、日本の近代文学の誕生をまた新たな視角で文脈化することができるのではないか。

セッション 4（「翻訳実践」）となる第二日目の午後は、初めに南山宗教文化研究所の Paul L. Swanson が「Reflections on Translating Chinese Tiantai Buddhist Texts」のタイトルで発表を行った。2017 年に 30 年かけた『摩訶止観』の全訳・詳注となる *Clear Serenity, Quiet Insight* を刊行した Swanson は、翻訳作業における指針として、異なる言語間に一対一対応はなく唯一の正しい翻訳は

あり得ないため、文脈が重要であり、さらに専門的な語彙および明確な概念のニュアンスと対象とする読者を大事にしなければならないと指摘する。その上で Swanson は、詳注を附した専門家向けの英訳を出版してから仏教伝道協会のためにテクストのみの『摩訶止観』を準備しながら、注記や原語を取り除いたことが翻訳にどのような影響を及ぼすのか（文を付け加えたり言い換えたりする必要はないのか）、専門用語は避けるべきか、サンスクリット語や中国語の原題を残さずにテクストの名前を英語に翻訳するのはどうなのか、といったことに留意しながら一つの原テクストから二つの異なった翻訳作品を創り出したという。

次に南山宗教文化研究所客員研究所員の Haewon Yang が「Translated Texts, Translated Realities: Reflections on How Anglo-American Writers Mediate Korean Religious Experience」のタイトルで発表を行った。Yang は 24 年もの間翻訳の仕事に従事してきた経験から、自分にとって翻訳の実践とは、生活費を稼ぐ方法である一方で翻訳作品によって自分の所属している韓国の福音派の共同体が執り行う宗教実戦に貢献する方法でもあるため、ある意味で「労働 (labor)」でありながら「伝道行為 (mission work)」でもあるのだという。Yang によれば、翻訳の「理論」において原テクストに対する「忠誠心 (fidelity)」はもはや顧みられることはないが、「実践」において訳者はいまだに著者の支配下にあって一定レベルの忠誠心が求められているのだという。なぜなら読者は、著者を「忠実に (faithfully)」表象する翻訳作品を「誠意をもって (in good faith)」読むのであり、まさにその著者の記名こそが出会いの場面で読者がその本を手に取る理由となっているからである。このような忠実な表象によってこそ訳語で読むときに原作が接近可能なものになるとすれば、アングロアメリカの宗教文献を韓国の読者に届ける宗教的な訳者にとって、翻訳という仕事は倫理的なものにならざるを得ない。

以上、四つのセッションにおける八つの口頭発表について概略を述べてきた。「翻訳する人間」を主題化する今回のワークショップにおいて、各セッションではそれぞれ西洋哲学、翻訳学理論、宗教文献の翻訳家などの立場から貴重な報告がなされた。管見の限り、全体を通じて特に言及されることになった概念を一つ挙げるとすれば、それは「倫理」であったように見受けられる。セッション 2 ではどちらの発表においても訳者の「倫理的な動機付け」について指摘されているが、翻訳するという作業の過程で倫理的であるためには、原テクストにおいて出くわした訳者自身の他者性を訳語の世界に生きる読者に向けて開いていかなければならない。各言語の背景に神々の存在を感知する繊細な訳者は、原テクストの世界をそのまま読者に伝えるためにあたかも原著者の神聖な媒介者として振る舞うことにもなるだろう。続くセッション 3 では翻訳学の立場から理論と事例が紹介されているが、ここにおいても最終的な翻訳作品において「動的価値」を実現するよう努める訳者のイデオロギー性を帯びた宗教的価値が真摯に問われるだけでない。日本に限らず西洋化としての近代化を受容することになったあらゆる地域において、辞書などの参照項に乏しい状況で訳者が自分の翻訳を「忠実な翻訳」から「自由な翻案」のどこに位置づけようとするかの判断それ自体が、伝統に絡め捕られた文脈化に他ならないという見地から、結果的には原テクストに対する訳者の倫理的態度というものが翻訳

作品の思想的なあり方を考える上で問題となるだろう。セッション4では、極めて豊潤な翻訳経験を持つ二人の発表者が、それぞれ実践家として宗教文献の翻訳に向き合うときの心得を開示している。この場合翻訳の正しさというのはまさに宗教的な意味での解釈と表現の正しさと一致することになるのだが、そうだとすればそれが結果的に達成されていることを客観的に評価できる基準はどこにも存在し得ないだろう。翻訳作品が体現する、ある面で非常に宗教性を帯びたニュアンスが、訳書を信じて読書体験を享受しようとする読者にとっては信仰的に（そして研究者にとっては学問的に）重大な意義を持つのであるが、それゆえにこそここでもやはり訳者の倫理があらためて問題として浮上する。例えばオープニングレクチャーの指摘を参照するならば、訳者が、理想的には真理の運び屋として君子になる可能性を考えるときに、個人的な思想においてだけでなく社会的な活動においても真理に対応することこそが君子としての訳者の存在論的意義を担保するのではないか。翻訳作品におけるパフォーマンスのあり方から翻訳行為それ自体が訳者に倫理的な態度を要請するのだとすれば、今回のテーマである「Homo Tranlator」は原理的に「Homo Religiosus」と重なり合っていると言えるだろう。

この「翻訳（作品・行為）の宗教性(religiosity of translation)」の問題について、この度のワークショップではまだ端緒を開いたばかりであるため、国際的な学術交流を広げていくことで議論をさらに深めていく必要がある。

さいとう・たかし
南山宗教文化研究所第一種研究所員